

A. F. Robertson

*Beyond the Family: The Social Organization of Human Reproduction*

Berkeley, University of California Press, 1991, VI+231pp.

「コロンブスの卵」の寓意をご存じだろうか？ そう、やってみると「なんだそんなことか」という単純なことが、実際にはなかなか成し遂げられないという意味である。本書の魅力をひとことで言えばこの寓意にたとえられよう。すなわち、個々の局面で展開される議論やその根拠とされる事例等はそれほど斬新ではないのだが（と言ってもその及ぶ範囲は驚くほど多岐にわたっている）、「再生産（reproduction）」という観点から様々な社会現象を解釈し、再構成して、新しい家族観、社会観にまでまとめあげて見せたこと、言い換えれば、再生産というお馴染みの（少なくとも人口学者には）概念を社会理論の水準にまで高めたところに、この本の「コロンブスの卵」的魅力があると言えるのである。ちなみに本書は1992年の William J. Goode 賞に輝いている。

著者 A. F. Robertson はアフリカの家族や経済を研究してきた人類学者だが、彼の問題意識はいたってシンプルかつフレキシブルである。再生産は社会を存続しめる重要な人間の営為でありながら、なぜ社会学者たちはこれまで軽視してきたのか？ 最終第10章で彼はその原因となった知識・観念上のバイアスを10点指摘し、詳細な解説を加えているが、それらはほぼ次の2点に集約される（第1章序）。

第1に、社会学者たちがこれまで経済的な生産や交換にばかり関心を抱いてきたこと。産業革命期に誕生した社会科学の多くは、社会変動の中心要因は技術革新だと信じ、唯物論的志向が強かった。その最たる例が人間がモノを「生産」するプロセスに注目したマルクス主義であるが、これに対抗して「交換」のプロセスを重視した他の社会科学（主として古典派経済学）にしてもモノの動きを重視したという点では同じで、人間の再生産が問題にされることはほとんどなかった。たまにあっても、モノの生産や交換によって一方的に規定される対象として扱われるばかりで、人間の再生産がモノの生産や交換を規定する側面はほとんど無視されてきたのである。

第2に、「家族」という社会制度に対する独特の強迫的観念が長らく支配的であったこと。われわれの多くはいまでも家族こそが文明社会の基盤であり、それは専ら私的な営みである再生産という営為によって存続してきたのだという大前提に立つ一方で、産業社会の進展によって家族の機能は縮小してきたとも考えている。このある意味でアンビヴァレントな近代的家族観は、家族は第一次集団であり、子育てや成員への物質的供給、保護、社会的地位付与などの様々な機能を本来担っていたが、いまや子どもの社会化や大人のパーソナリティの安定化といった心理的・情緒的機能を残しているだけだとする家族機能論に代表されるように、再生産を家族の“基本的”あるいは“固有の”機能としながらも、事実上、再生産の広範な社会的意義を黙殺し、残余的・隠喩的意味しか与えてこなかったのである。

このようなバイアスに対し、Robertson は人類学から歴史学、社会学、経済学、人口学にまで及ぶ該博な知見を武器に、再生産概念をまさしく再生する旅へと出る。まず第2章で、再生産の物理的プロセスと家族や世帯との基本的な関係が確認され、家族と世帯の再定義が成される。すなわち、家族とはそもそも再生産プロセスによって生じ、時間の経過とともに創出される巨大な人間関係のネットワークの構成要素であり、決して“自然な”、“永続的な”関係ではなく、むしろ再生産プロセスに応じて絶えず計算される流動的で不確定的な社会関係であること、世帯はそれを居住という一時的な断面で捉えたものに過ぎないことが強調される。続く第3～第5章では、この基本的関係がいかんして経済的・政治的関係となるのか、あるいは両者がいかなる相互依存関係にあるのかが明らかにされる。結婚、出生、加齢、死といった一見すると個人的・生物学的な事象が実はきわめて経済的・政治的利害によって組織化されている一方で、労働や資本、消費、投資、余剰、貯蓄といった経済的事象が再生産プロセスにいかん大きく依存しているかが豊富な事例によって描かれる。さらに、このような複眼的視点が「世代」、「ジェンダー」、「社会階級」を理解する上でいかに重要であるかが示されている（第6章）。

第7、第8章はこの本のハイライトを成す。近代社会の形成史を再生産の（による）組織化という1本の軸で大胆なまでに切ってみせる第7章は、粗雑さを指摘する向きもあるだろうが、非常に説得力があり、給与（salary）と賃金（wage）の制度は労働者の再生産プロセスを規定することによって社会階級の再生産を維持する装置だと主張する第8章も、コンパクトながら大変明解である。最後に、第9章で遺伝子工学などの技術進歩が近代的家族観を揺るがし、いやがおうでもモラル上の危機が生じることが問題提起されたあと、最終第10章で初めの問題意識へと立ち返り、社会学者として再生産をどう扱うべきかが再び確認され、旅は終わりを迎える。

本書は大学の初級学生を念頭に書かれたようだが、内容は鋭い洞察に満ちており、人口学や社会学のスペシャリストを自負される方にも是非一読を薦めたい一冊である。しかしそれにしても、いつも感じることなのだが、日本ではなぜこの種の教科書がなかなか現れないのだろうか、人口学に限らず。（才津芳昭）